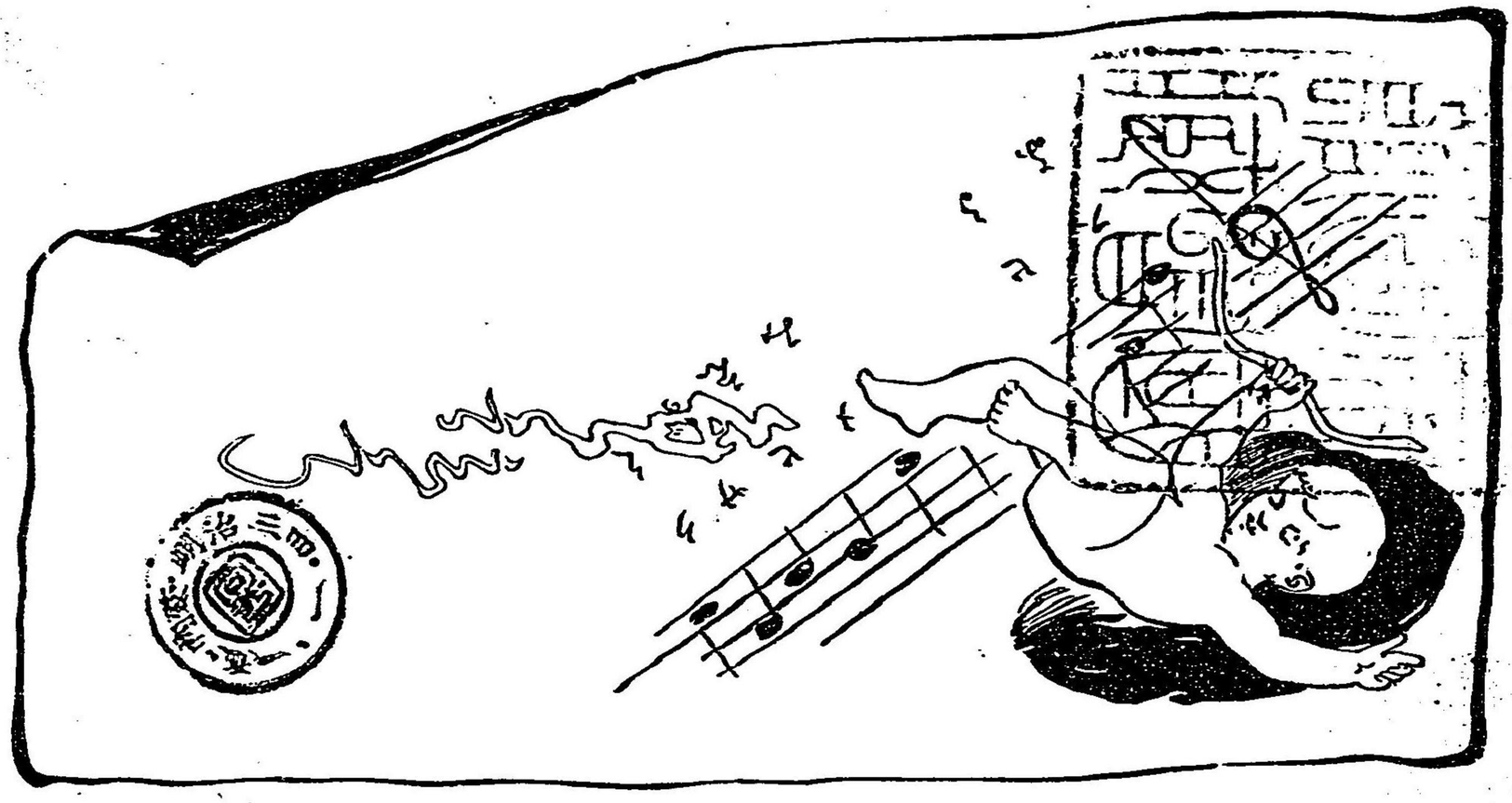
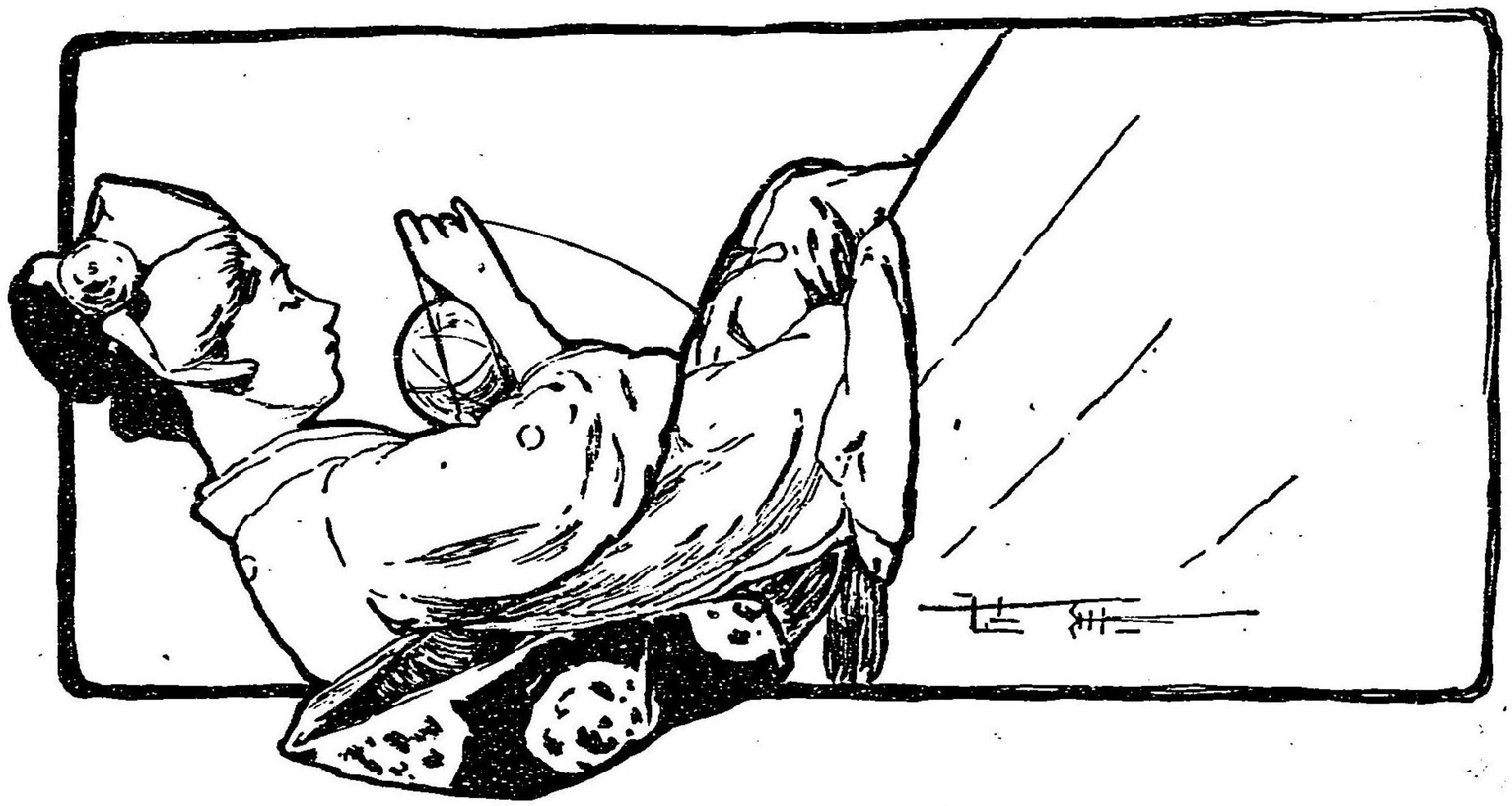
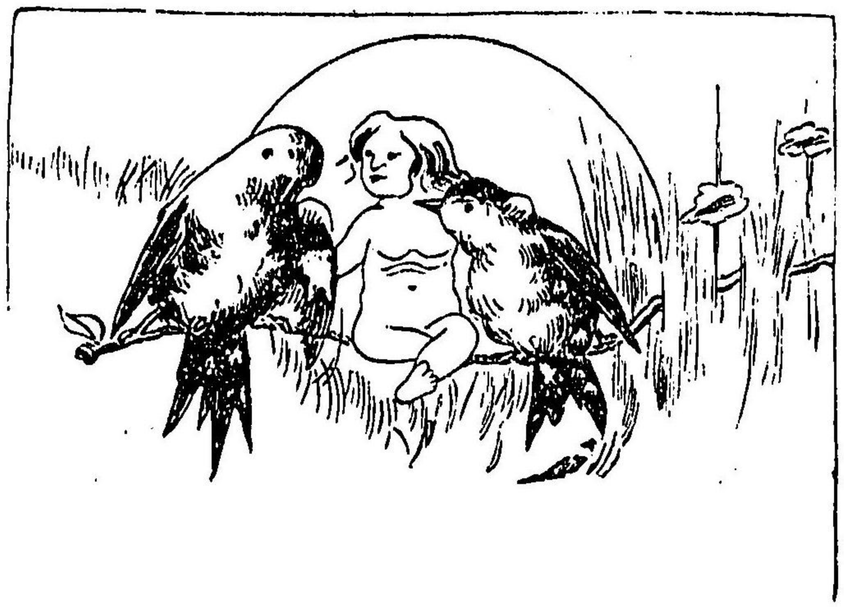






吾生れて世にはぐれたる
迷ひ子の、絆を狭いて跡ら
んにも既に弓を持ちて野
に立てり、射手の弱きに矢
開きせんは早かれど、吾一
張の弦無き弓、放たぬ征矢
に響きなからんや、

目次

	頁數
妹	一
胡蝶の墓	五
紅葉蓉	八
希臘半島	十
湯の香	十九
蛙の聲	二十二
いさよふ雲	二十四
行く春	二十七
こさくら	三十二

大雪小雪……三十六
みづわか草……三十九
やほじほ……四十二
月のはゐ……四十四
ちぬの海……五十
露の玉章……五十四
夕の聲……五十九
朝の聲……五十九
春風怨……六十五
小羊……七十一
漫吟……七十三
戀の神……七十六
嚔の里……七十九
經木流し……八十四
天女の聲……九十三
山水秀……九十六
自然の文……百四
星の光……百七
呀ゆる夜……百九
花すみれ……百十二
あじろ守……百十七
浦なれ衣……百二十

残る心……百二十三
罪の終……百二十六
征矢獵矢……百二十九
表紙口繪……一條成美
挿畫六葉……一條成美
序文の繪……無名氏

無弦弓

河井醉茗著

妹

人に隱れてさびしくも
詩にすさみたる一人子の
われに持つべき妹を
憾みや神のわすれたり
くちべにさしくず髮わげず

容貌をさなく雄執りて
吾家の日記を書しなば
わゝ我歌をなげうたむ

世の荒磯をわたるべく
除りに波のしづかなる
ちぬの浦わに二人住まば
星の若きも戀ひざらむ

白きむらさき紅梅の
膝にみだるゝきぬ糸を

君いと密にまかんとき
戀せぬ胸やとけやすき

只美くしきいつはりを
戀と名づけて酔はんにも
葡萄の味を知らぬ吾の
など杯をふくまれん

生命の橋に手を取らば
波りやすかる水の上に
愛は清くもうつらんに

一人の影のさびしさよ

提琴に棹取る身さもならばなれ
君をわたさはゝろ足るべく
朝もよし紀路の浦わに山はあれど
妹に見せんは玉津嶋の山
小さき星落なば袖に包まんを
いつまで人に遠ざかるらむ

胡蝶の墓

胡蝶よさむるとと勿れ
われ等がつきし奥城に
春は花咲くあしたまで
再び覺むるあとなかれ
栽は實になる秋のはて
秋海棠のはなは折れて
冷たき露もふかゝるに
うべ弱き羽の萎れけむ

廣き芭蕉の葉の面すら
細く裂いたる西かぜに
翼いためず地に落ちて
眠れる蝶の小さきかな

わがたなぞこに打戦て
いき温かに吹きぬれど
さめぬ姿をくづさずに
葬りて置くあきの日や

寂きに覺むるあと勿れ
美くしき者は脆かるに
觸れろ冷たきかぜの音
土をかつぎて靜かなれ

花をわけたる移り香は
とはに彼女の抱けるを
くらき林に吹きさわぐ
あらしは何を埋むらん

よき夜惜み宿直のひまをかうらんの
月にかざすや狩衣の袖

紅芙蓉

人のキッスを許さじと
未通女の胸に咲き出て
花あたらしき芙蓉かな

おぼさじとあろ包みたれ
露はあしたの風に落ち
未通女の膝におぼれたり

血汐やかよふうす紅の
ふれなば裂けん花瓣に
誰かは歌を書き得なむ

はなの繪筆を紙に戯せ
をとめさびする葉隠に
秋は雲あそあふがるれ

一葉の草のふに吹きて
眠をさそふとあろに
花や未通女の夢を見む

希臘半島

バイロンの DON JUAN 中の一節の意味

アナカの山はたかく聳にて
マラゾンの野を前に望めり
マラゾンの野は廣く開けて
鳴多き海をまへにのぞめり

希臘の海、希臘の山
デロスのみやゐるアテナの像
島は昔にかゝやきわたれ

國のちからは既にほろびぬ

英雄の詩はホーマーに起り
サッポウの歌は戀に殘れり
今は祖國の岸をはなれて
高きしらべも西にうつりぬ

此野に負けて屍となりし
ペルシヤの人の墓場を踏めば
奴隷の國はおとろへたれど
なほ獨立をゆめみるなり

むかし高きに王坐をまうけ
サラミス灣を見下しながら
わが水軍のおほきをほこりて
ペルシヤの王の奮ひし時よ

わけに敷へしいくさの船は
夕日を待たで沈められたり
勝を描きし王のまなこに
うつるは水と雲のいろのみ

負けたる者はふたゝびしらず
わゝ勝ちし國何處にありや
新月の旗ひらめくとあろ
ギリシヤの島の草も靡けり

かちどきの響きはながく
保ちしうたは勇ましかりき
時なるかなや戀の時つくる
よわき吾等を憤慨らしむ

土地よ、汝の胸よりかへせ
三百のうちスパルタ人の

三人なりとも吾等にかへせ
きけテルモピレ、血は乾くとも

吾等はゆかん、一人なりとも
地の上に先づ起つ者あらば
吾等はゆかんさりながら君
若きかれらは凡て默せり

然り、止みなん哉
止みなん哉われ
サミアンの酒もて

この杯をみたせ

土耳古の民にいくさは委ね
われは葡萄の酒に醉ひてむ
ピーリッタの名は方陣よりも
舞踏の場にわすられざらむ

カドマスの手に習ひし文字も
アポロの神にさゝけし歌も
奴隷の子等にのゝしるを惜む
寧ろ舞踏のふりを强ひんや

サミアンの酒もて

この杯をみたせ

酒に歌ひしアナンリオンも
なほ一度は人につかへぬ
同じギリシヤの島人ならば
王を仰ぐも恥辱ならんや

土耳古の軍威、羅馬の略
汝等が栖はあやふからんに
スリの山ざとパルガの岸邊

勇士の血統は傳はらざるか

サミアンの酒もて

この杯をみたせ

國ほろぶれども歌は優しく
葡萄の樹蔭に少女は舞へり
美はしき子の姿をみれば
涙は人を醉はしめざるなり

入江の風のもすそかへすを

支ふる手には國もなからむ
愛にみちたる胸をひろげて
やがて奴隷に乳を含ますか

吾さゝやきは波にかへして
大理石もてたゝめる岩に
神よしづかに眠らしめよ
奴隷のくにはわが國ならず

其さかづきを
衒き落世

湯の香

少女の爲に

ゆふべの雲に伴なはれ
箱根に入るや秋ぐさの
花の色さへさびしきに
つくらぬ眉のをさな貌

むかしをとへば芒生ひ
亂れし石のはざまより
巖が根傳ひくさむらに

かくれてゆきし水の音

泉の神の頬をふれて

あたゝかにおろ湧出れ

知らずや浴む鹿の子の

ろの滴だにふくまざる

湯槽に眠るわらは女の

胸乳ともなき胸の上に

浮世の涙やうたざらん

姿も透いてみゆるかな

秋はつゆ世くはなる妻の

恙れて消ゆる運命なりや

眠れ玉なす湯のうちに

湯の香の失せて涸るゝ迄

蛙の聲

村にすぐれし少女子の
明日は嫁入る日なりけり
雨ふり田でし小山田に
蛙のこゑはなほやまず

霧れんと待し雲とぢて
小雨の中にいもとせの
契りかためん日はくれて
蛙のこゑはなほやまず

少女の幸をよろこびて
雨をわすれしむら人の
酔ひて歸れる此あさけ
蛙のこゑはなほやまず

太作がかどの苗しろも
植附るべくなりぬれど
太作も出ず雨もやまず
蛙のこゑはなほやまず

いさよふ雲

風しづかなる朝なゝ
少女が家のそらたかく
とゞまる雲の一ひらに
嬉しき色のうかぶなり

風ふきそよぐ夕なゝ
少女が家のろたかく
とゞまる雲の一ひらに
悲しき色のうかぶなり

朝ぎよめするあけ姫の
影もしづかに消去りて
のゝるか袖の横ぐもに
別れてはしる小さき雲

燃ゆるがごとき夕映の
またゝく暇に跡もなく
暮ころせまれ谷の日に
おくれて歸る小さき雲

明けぬ暮れぬと往復(ゆきかへ)る

少女のさとは遠けれど
通へる雲はひとひらの
遠き戀あろつゝみたれ

雲のこゝろは覺り得で
空しく人になりはてん
少女よかへれあまつ空
光はとはにわかゝらむ

行く春

落花のかぜの白うして
春波ふれる江上を
小雟捲あげて見る君の
懐はとほく盡きざらむ

げに歌人をなやまする
春の行方も知らなくに
嵐はいためあめはうち
亂れ亂るゝ八重つばき

我に微吟のうたなりて
君が絃壁絶えんとき
たけなはなりし春の夜の
星をかぞへしろれも夢

歌書きませと強ひぬれば
酔の紛れにさらく〳〵と
筆はしらしゝ舞あふぎ
墨のにほひは残れども
うま酒醒めてつくす

姿海命に世をいたみ
司馬の涙をろゝぎては
わかちかねたる袖と袖

立舞ふ曲のみぢかきに
わわたゝしくも櫻散る
はるの心はわかれゆく
きみが心にたりけり

歌吹海裡のゆめのせて
せんりをくだる両岸の

越山呉山たゝおほく
柳はさらにながゝらむ

わがいのちこそ一筋の
其ともづなに繋ぐなれ
こゝろしあらばこの夕
はるの潮の満ちざれな

多情は似たり情無きに
君玉のごとうつくしく
我鹿のごとかろき身の
いつ迄共にまみえなむ

なみだぞかゝる欄干に
君を送りてたゝずめば
雲なき空のをちかたに
春のひかりは沈みゆく

十津川や北上川に筏くみて
海に出でんは幾年の後

ざくら

墓場の苔に小さくらの
はなちりかゝる雨の夕
而影にしてかへるとも
父はもいまや家ならず

世づかぬ吾の子なれども
さすが産毛を撫でし時
餘りにむねの若ければ
親といふにも憚かりし

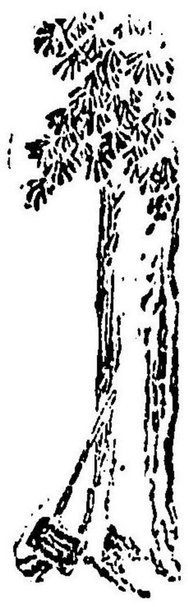
黒髪ながくらうたけて
花の小櫛にけづるとき
詩にはてゆく吾をすら
親と呼ばんは雖ならず

吾子よかへれ
うつし世に
花は根になる
はるのくれ
人はつれなき

ふるさとに
せめては汝を
のあすべく

なれし軒端を
あとにせば
守るは去年の
つばくらめ

つばくらめこそ
かへらめど



歸らぬ稚子よ
いとし子よ

など歸り來ぬ
ながらへは
遠く行くとも
告げざるに

大雪小雪

大雪こゆきふりしきる
都のまちは小夜更けて
闇にすかせばほの白く
ひと筋ほそきよ小路

吹雪の風のたに〳〵に
をさなき稚子の靡するは
あはれ添乳の夢さめて
知らぬ軒端に泣けるなり

世を捨てゝあそ最愛き
吾子も雪にすつるなれ
産衣の袖のゆたかなる
幸はも持たで生れけむ

凍ゆる迄のいのちぞと
神に任せて去りにしを
かゝる夜に來る雪女
人ならぬ手に拾はれぬ

雪ふる夜毎みやゝ路に

稚子の泣く音は聞ゆれど
いだける人の影はたゞ
雪に紛れてみえわかず

つれにたく香烟の香さきゝますか
胸しづゝなれ戀をおやまたむ
高どのに一夜語りの花を惜み
箱根の山のはこに秘めてむ
膝の上に稚子抱きのせて君と共に
今宵の如き月もみしかな

みづわか草

津國阿部野の奥城に白木の墓標新らしく『故某氏何子奚豆若草花妙耶女之墓』と書されたゝ、あれなむ十七歳を一期として空しく神去りし彼女が形見にぞあなる。

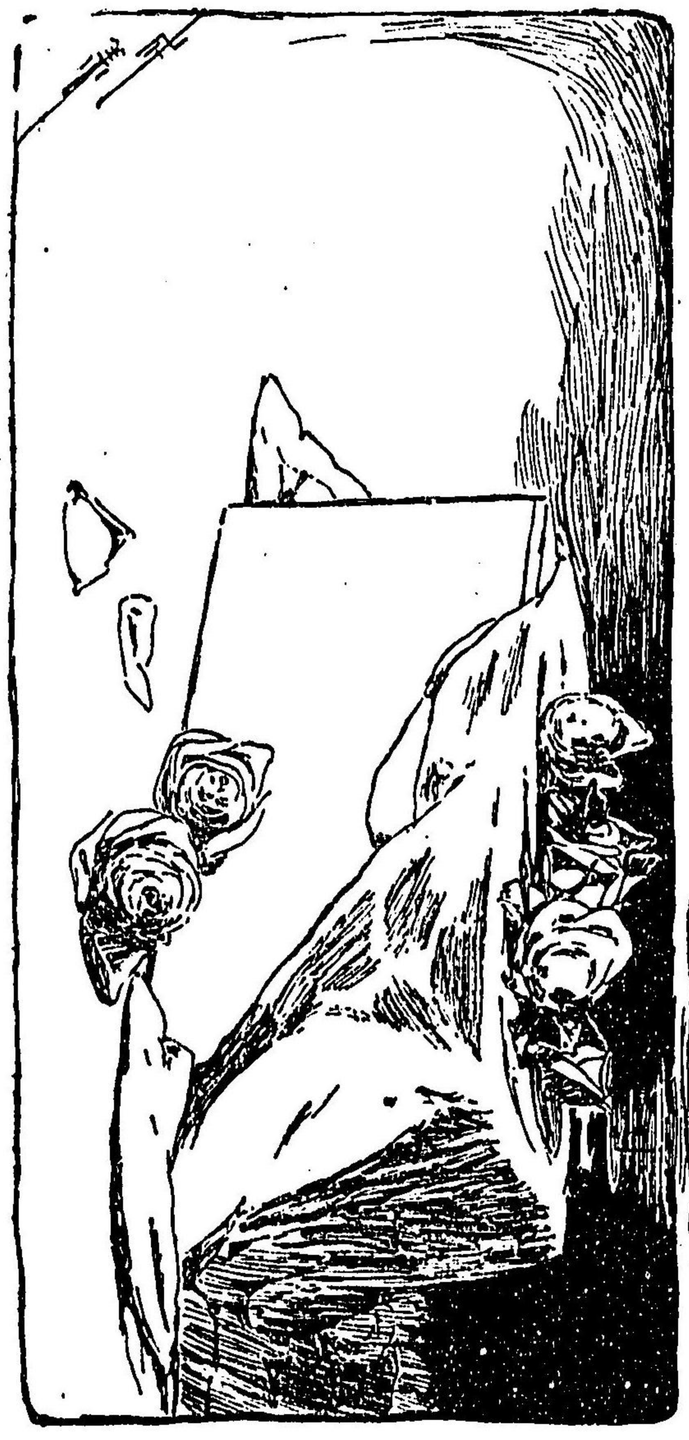
妻と呼ばるゝ幸なさは
妻となりてぞ覺るなる
涙なかけそをとめ子の
魂のゆくへや迷ふべき

森のひかりにわかぬ草の
自づと萠ゆし戀ならば

世を秋風のうらみなく
たゞ柔かに生ひぬらむ

よわき心をつゝみたる
よわきむくろは荒金の
土にかへるも天つくに
常永遠女にて在すらめ

か黒き髪もほつれずに
花の小袖もそのまゝに
たゞわりし世の姿にて



棺のうちにおさめしを
有線無線にふきわたる
松の鼠のおしろなきも
みづわかくさの郎女は
神にしませば
ゆめはなからん

やほどほ

其舟かへせあまの子よ
野にも山にもあき果て
あゝの磯べに遊へる
我にをかしき歌もあり

浮世の岸をとほざかり
幸ある沖にひとりゆく
いましと共に漕出なば
たのしからまし海の色

眞帆や片帆やゆき通ふ
舟路の果は知らなくに
涙のまに〳〵空ひろき
雲のゆくへを追はむ哉

いそ馴松のおのづから
眞砂に生ひし身なりせば
胸は玉藻ときよからむ
其舟かへせあまの子よ

月のはえ

月蝕の夜、霖霪なる夜雨を懷ふ

神のみあとを傳へんと
はるかに望みし人の世に
濁るとは知らで下りけむ
ほしは光をかくしけり

星の消ゆしをみ空なる
星より星にさゝやきて
女神のおはすもち月の
かゝやく宮に傳へけり

つきの女神の星の上を
いたく哀とおぼしつゝ
憎みたまふや人の世に
光かくさふ雲召せど

雲はかへらずひめ神の
自らひそみたまへれば
月はみる〳〵影失せて
闇になりゆくあめ地や

あらゆる星の現はれて
月をいさむるあまの川
河波きよくながるれど
又仰ぎ得ぬひかりかも

＊　＊　＊　＊

葉山繁やまおもひ入る
筑波の山はふかけれど
うき世にあさき男子の
今宵も月にむかへるを
影ゆくりなく消えしより

胸はなやみに鎖されて
ミューズに祈る赤心の
うたの想や盡きざら・む
世にディヤナの神ならで
慰めも無きわかき子の
トラモス山の絶頂に
眠らむことを願ふらむ
女神のたまふつゆの
月のしづくを袖にうけ

痛める胸にろろぎしも
今はつれなき闇のろら
かばかり潤るうつし世に
夜の光のなかりせば
清けき形をなにに見む
長き眠りもやみにして
忽ちかかるうすぐもに
ミューズの神や乘りまさむ
雲のゆくまに現はれて
つき長へにさやかなり

ちぬの海

かへりみすれば大伴の
高師のはまは遠にして
月に湧くなる八百汐の
淡路をはてかちぬの海

字奈比男とあひきそひ
妻とひしけんまずらをの
はやち吹捲く汐さゐに
ふなのりしけむ渚かも

行方もしらに雲のはて
天とぶ雁のさかりゆく
壁にまぎれて棉の音の
戀に聞く夜やつらかりし

ふぢにのうらに鱸つる
蟹の子ならてうつゆふの
こもりてたけし津國の
芦屋處女のおもかげや

長きくろ髪たがねつつ

さしも小倉のみだれざる
氣高きふりの夢に入りて
うつたへにあろ戀渡れ

怪うつるものの
いまと昔をたがへけむ
戀つつあらむ術なさに
うつつともなく舟にのる

清水湧くてふ和泉路の
ちぬ男とはうまれしに
見まく欲するくはし女の
芦屋の里に今もあらんか

露の玉章

君が送りしむらさきの
絹紐に挿しし松の葉を
抜くに吾手の震ふまで
ふかき思をつたへしよ

歌は秘すべき人の世に
つゆの玉づさ交せども
たゝ詩の神の前にこそ
吾等二人はきよからめ

七いろ虹のごとがく
消やすき戀の帶しめて
くくるに易き胸ならは
わが前髪はみだれじを

嗤子の露のさらめきて
まほに語りし夜は無けれ
一目にしるきたゞ人の
世にうらぶれし果ならず

さしひく汐にみづ禽の

羽音さびしきいろの風
君さりげなきためいきの
胸に覺にしゆふべかな

心にれくるまつはらの
別れは夢とさるめずして
かへらぬ雲はいつ方の
袖ふる山にかかるらむ

戀ならませば裾に摺る
ころもの色と亂れんに

亂れざりけり正しくも
亂れざるこそ苦しけれ

苦しといふも戀ならば
リボンの絹の紫の
只なつかしく慕はしき
思よなにたとふべき

知らぬといふも惑にて
悪魔の手より放ちたる
戀のさつ矢の射ぬきなば

吾はたほれむ君が腕に

釉裏に斷つべきたげは教へたれど
都の紅絹に歌は書かざりし
梅もどきなるてんの實さ枸杞の實と
花は山茶花しら菊の花

朝の聲夕の聲

夕の聲

たゝ一つきのうま酒に
胸の血しほは狂ひろめ
酔ふて佝佝ふ真砂地に
夕のこゑを聞かんかな

サタンの影や包みたる
くもは南にたゝまれて
茲にしばしは世を咀ふ

夕のこゑはとほざかる
天使の星のたゝふたつ
闇よりさきに現はれて
美しき世をかたり合ふ
ゆふべの壁は近づきぬ
松の葉越につたへきて
遠く寄せては遠く去る
はるの潮のひゝきにぞ
ゆふべの壁は残るなる

光とやみとうすいろに
別れもわへぬ大みろら
夕のこゑのしづけさに
歌はぬものは月とわれ

朝の聲

神の子

つかふる山に幸あれよ
つかふる海に幸あれよ
曉のみ神のりたまふ
朝のこゑのほがらなり

人の子
通ふ馬行くうまや路の
鈴の音よりあけろめて
夢より起きし人の世の
朝のあそけがれなき

神の子
水鶏刈るてふ信濃路に
打羽ぶきゆくあら鷲の
翼のかぜのつよきごと
あしたの聲は空に滿つ

人の子
母の添乳に添ひあきて
ふしどを脱けし嬰子の
わけなき節の歌のごと
朝のあゑにあやぞなき

神の子
愛の姫がりつかひして
かへさに聞きし我袖の
露をはらへば小草にも
あしたのあゑの情あり

人の子

袖のまくらに嬉しさを
つゝみてかへる舞姫に
ひかれて伸び し青柳の
朝のこゝろはほそやかに

神の子

あしたのあゝの後ろにぞ
ゆふべの壁は近かるに
君と我とはきかずして
いざや別れむ
かへれ人の子

春風怨

せめて女とうまれずば
たちのおやのみ心に
背きまつりて惱むまで
深くも罪はつくらじを

あひの俘となりはてゝ
心にあゝろまかしかね
身は春ならぬ花のころ
ろらもくもるか八重霞

結びしものは神ならで
親と親とかさだめけむ
縁にあらぬにしをも
踏なはざれば辛き世や

進まぬわしを強られて
たゞれば長がし暇みち
今日來し故を思ほへば
胸は蛸蝶とみだれゆく

いつしかいでし渡場の

柳がくれに立つひとを
それぞと母の告ますに
またも心のおくれつゝ

いつの世よりの習俳に
かたみに影も見ぬ人の
一目面わを見かはして
千代の契をむすぶらむ

あゝろゆるしゝ彼君に
見ゆることは許されで

知らぬ男を背と呼ぶも
いもの鰓はつくされず
汀のかぜにひら〳〵と
さくらおぼるゝ舟の中
乗よとわるに術もなく
小褄かゝげて移れども
伴なふ者はのりもせず
たゞ其ひとゝ二人のみ
渡すが水夫の何氣なく
はやさしいだす水馴棹
情わりとも行くみづに
うかべるはなは意なく
一つ小舟にわたらふも
岸はふたつに別れたり
むらさき匂ふわが袖を
小膝のうへに重ねつし
仇なる人に見られじと
片頬背くるおくれ毛や

泪持つ目にうなだれて
ものさへ言はぬ吾様も
櫂のふちせに棹さゝぬ
水夫や知るべき歌の節
いやな風にも
なびけよ柳
いつか東風吹く
春もあろ

小羊

冬の夕日のさひしげに
廃き牧場の暮れそめて
枯生に風のあるもなし
ねむるとみにし小羊は
永遠に去りて帰らざる
今日の夕をいのるなり
何をかいろぐ人の子の

夕もしらず朝も知らず
心焦られて驅げるよ

塵わぐるべき風に立ちて
雪なす毛さへ亂さすに
いかに羊のしづかなる

孰れ牧場にはつる身の
たゝ休まずに急がずに
世は倦まであそ人はあれ

漫吟

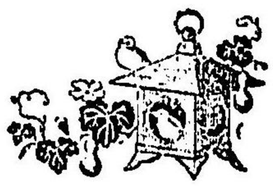
自然の母にいだかれて
落るやなぎの一葉にも
ふかき想をたどるてふ
やうら若きうた人よ

人の子をみる塵のごと
ひとりたかきに嘯きて
星と語らふ夜半にのみ
意味ある歌はなるてふか

吾生れたるひとの世を
風族の洲とひたぶるに
遊ざかるべく迷ふなる
詩人よ胸のなどせまき

たゝ冷やかに靜かなる
自然のさかひに遊ぶとき
世の係累はたゆるとも
熱き血汐はわかざらむ

けはしき中に平和あり
危ふき中にやすきあり
温うしてなさけある
人の子と語れ
うたぞあるべき



戀の神

神代なからの風かよふ
世を住吉のまつかゆに
ゆばしまどろむ夢の中
戀のみ神のあらはれぬ
歌にかくれてわたらせ
狹うみてゆく人の子よ
眼をひらけおひはたい

清くあるべし罪の爲に
戀はけがるゝ色ならず
滄溟の水にごるとも
こひのいつみは一筋の
清き瀬をこそつくるらめ
やよ歌人よ起きいでゝ
戀は神なりとこしへに
神はゐますと叫ぶべし、

世は驚かむうたがはむ
よし驚くもうだがうも
かみの使と名のりなば

はつせの山の
やまのまに
いさよふ雲を
いもとみし
いにしへ人の
こゝろはや

曙の里

雲はまぎれて聞えねど
庭のやり水さら〳〵と
枕にひゞくなつの夜に
ひとり寐待の月をみん

松かげながら蚊帳越に
冴えし光のむねに入り
想ひの羽のたゞかろく
去年にぞかへる和泉路や

高師の濱にわびねして
月にわさりし貝がらの
靈しかねたる歌反古に
にがき潮もかゝりけむ

思屈したるわがいろを
病むとやみけん宿の子の
よろの情にさぐられて
片頬に笑もうかびしよ

ひとの涙のかゝらぬを

袖のうらみに返しては
松の葉ひろふ松が根に
小き壁こそかくれたれ

汐風ならて小夜更けて
ふるなき月に誰か訪ふ
おゝ吾友よわたらしき
浮世のうへを語れかし

わりし姿のをさなきが
あれかすめゆく月の面

さやに見ゆるを吾友の
たゝ白雲とみやるかな

それより今は國とほく
都のはてにさすらふも
里はあけぼの光りさす
若き望みのなからずや

靜かに開けばさらさらと
やまず變らず行く水よ
相思ふ人のありもせば
今宵の夢をさそひゆけ

經木ながし

何處のやども干闌盃の
餌うちしめる此ゆふべ
浦わづたひに波よけの
石垣とほきうみのかぜ

遠山のはをはなれたる
月や經木の文字よまむ
緑しもうすきうす墨に
俗名はなとはしりがき

人目をよけて東の間の
ふでのはあびは拙きも
消えぬ誠のともれるを
冥府の泉にながれゆけ

はなせばかろき浦風に
一葉と浮ぶわだつみの
波より波のはてもなく
またたく星のきえんとす

想につなぎし玉の緒を

夢より暗く切りはてし
つれなき神は潜めども
のどかに打てり磯の波

いざり火消にて君一人
影なき闇に立ちしとき
花の裝に遣ひよりて
砕けたりけんいさ波

など死の神に誘はれて
まどひし人を支にざりし

か弱き胸に燃ゆる火を
冷たき音に消さざりし

此世のほだし断つ前に
よそながらにも覺りなば
何とかそれと慰めて
哀のはてはみざりしを

妻をむかへし次の日よ
吾に残ししかきをを
よみ返す手もわなきて

現なりともおぼにざり

あらはに洩らし給はねば
露さとるべきよしもなく
よそ吹く風と過しをし
つれなしとあろ怨みけめ

胸やみだるるとき衣の
とけよと見やる眼さへ
毎に見熟しすずやかさ
只美はしとれもひてき

とみに言葉の打たえて
優しき眉のくもれるを
何偲ぶらんとひもせで
只いたつきと思ひてき

己がゆんでと君がめ手
重ねて涼むおばしまに
くれなゐ染る頬の色を
をみなの常と思ひてき

とく癒にたまへと朝夕に

病のとあをたづぬれど
やつれし面わ打ふりて
なに一言もものたまはず

落つる涙にいろあらば
おぞき我にも覺りしを
傳ふまくらの秋かぜも
露のあさろは知らざらむ

土もかわかぬにひ墓に
盆燈籠のかみやれて

きみが姿をてらしなば
夜ただ守るはやすけれど

かへらぬ魂は天つくに
戀しる神のみ手づから
いと安ちかに守るべし
暮ひたまひろ塵の世を

仰げばたかく星冴えて
更けゆく秋の靜かなり
戀にはあらで戀になく

今宵と知らて
悲や待つらむ

筑波根の男神女神も眠るらむ
よき夜を守れ二十八宿

一茎の草も佛になりぬべし
白きは露か水跡の花

天女の聲

赤にさきだつしら塩の
清きかをりに誘はれて
江南の路とほけれど
夢路の魂やぬけいでし

巫山のみねは高うして
白雲とざいただきに
楚王が戀のさめごと
松の葉風にのあるらむ

みどりの苔の滑らかに
しろき花さくく洞のおく
いはほのとこの手枕に
神女はやすく眠るらむ

あしたに出る雲となり
夕にそろぐあめとなる
姿はみえてあまつかぜ
玉のみあるぞ聞ゆなる

三峽の水きよけれど

山をいづれば濁らなむ
世づき給はぬ姫なれば
うべこそ神に在すらめ
塵に生れしひとの子の
現にとはんよしをなみ
神女のかげを仰ぐまで
ゆめの浮橋絶にざれな

山水　秀

高師の濱

なほも媼はかたるらく
月洲る夜半の片びさし
昔のさびのをかしさを
寝覚にかたる夫もあり
拾年の前にいとし子は
都のそらにのぼりしが

春と秋とのおとづれに
恙も無しと知らせ來ぬ
よしかへるとも孤屋(ひとつや)の
何をゆづらむ吾妻路に
望しあらば待たずとも
子は子の上に幸あらむ
世の姿とも さとらねば
汐の滿干にいさりして
幾年なみや寄せにけむ

夫も吾身もふりたれど
ふりしと知らぬ五十年は
靜けき夢のただひと夜
隙りといへば華分けて
舟やる外にしらざれば
あれ見そなはせ此松の
陸になびかぬ枝もなし
世は吹く風に任せてぞ
安くいのちは終るなる

網干す尖や待つらむと
枯し木葉を籠にみたし
行くか姿もかくれゆく
松を隔てながむれば
高師の濱は名のみにて
なみ高からぬ夕なぎに
梢のひまをかへり行く
白帆にさすやゆふ日影

寧樂の都

寧樂のみやこの八重櫻
紅葉する頃來て見れば
あり榮えの夢のあと
古きみ寺はのこれども
みほとけ黑く雨しろき
幾よあらしや埋めけむ
綠のいらかはけむして
朱のほろ殿いろあせぬ
大宮びとのわたりけむ

大路小路はれち葉して
むかし男やかよひてし
春日野あたり鹿ぞ鳴く
深きうらみをきぬ掛の
やなぎにのおす水の色
あひも位もゆめのまに
七堂がらんわきのかぜ

法隆寺

名も無き墓に暮初めて

やまもとけふる班鳩や
里の小鳥のかなしげに
なにを呼ぶらむ法隆寺

かげほのぐらき金堂の
ふがきし壁を共に看て
赤裝束曳くをとめ子の
むかし語るも懐かしく

黄金の色のすすけたる
ふるき佛ををろがめば
我も千歳のいにしへに
かへりし如き心地して

自然の文

ねむりさめゆく空の色
ややに光をあらはして
野末に淡きやまのはに
ひき残されし夏がすみ

人の通ひしあともなき
緑さやけき田のくろの
名もなき草の下葉にも
おぼるる許り露置きて

昨日のゆふべ植はてし
水田にうつるわけ雲に
いさなみよる朝風の
かるき袂をふきかへす

つきぬ思ひも短夜に
なかばはなりし吾歌の
歌の續きをれもほへば
拙かりけりよべのうた

くらき燈にふてとりて

たど〳〵しくも綴りたる
文字の心のいとあさき
をぞくもよしと許ししよ

自然のあやを人間の
寫すたくみの愚かさよ
愚かと知りて尙もまだ
筆すてかぬる可笑さよ

星の光

糸くりやめて窓の外を
うまごと共に打みれば
西のはやまは暮れはてて
水よりあはきろらの色

きらめく星を指さして
見るなはさずや祖母上と
教ゆる方をみまもれど
眼はきりのかかるなり

窓よりみゆる夕つつの
かがやく迄も機織りて
ゆふべ〳〵と送りつつ
六十路餘りの年は經ぬ

人のもろさになそらへて
鑞らぬものとは思はねど
なれかゆびざす星影の
見にわかぬ迄老ぬるか

冴ゆる夜

よく物の怪の祟るとて
はしらもたてぬ燒跡の
いしずゑのみぞ殘るなる
枯生に月の冴えにたり

埋れもはてず苔蒸して
水しづかなるふる井筒
草木もねむるま夜中に
汲む人あるぞ怪しかる

たけの黒髪ふりみだし
雪なす肌にをし氣なく
水垢離しけむ乙女子の
姿みたるはあらざめり

戀にやはあらぬ面影の
いたくしなにてかなみ
あかつき深く歸りては
霜にもわとは殘らじな

少女通はずなりしより
拾もやらずに殘りたる
つるべの水に人しれぬ
月はいく夜か宿るらん

君と吾二人乘るべき船をつくり
海原ゆかば戀の國はあらん

飛鳥風あすかの里に今も吹かば
大和の山をみなうたにせむ

花すみれ

なれし庵をふりすてゝ
心ほろくもわれ行くを
なれも泣かずやはな薫
やれし垣根に寄添ひて
語るも問ふも今日迄ぞ
さらばよ草われ行かむ
行んといふを汝はしも

笑もて吾をとゞめつゝ
なほも思をまどはすか
おほし立てし人もなく
枯れゆく後も知らざらん
知られど清き色はもつ
ちりさへすえぬ面影の
清きをめでゝ汝にのみ
神はゑみをや敎へけむ

汝がかざしのしら露も
なみだとかはる袖の上
人と生れしはかなさよ

うつろひ易き世の中に
つれなく行くも止るも
穢らでわるはいつ迄ぞ

荒しいほりに殘るとも
ゆかりの色のあせゆくを
あはれむ人はなからむ

さとらば頓て汝が身の
假の榮えをふりすてゝ
世をはなれやはな葉

立よりみれば一しほに
花のあまひのたをやかに
世を厭はしき色もなし

世は我のみの世ならぬを
せまき心にあやまりて
手折ちば仇となりぬらむ

別れの笑をそのままに
ながため神は守るらむ
さらばよ葉さきくあれ

あどろ守

より來る氷魚は多かれば
廿日の月のぼりしを
いで歸らんとあじろ守
病めろ妻おそ家に待て

待ち待らんと衍かにも
應へし聲をたのみにて
歸れば月はのぼれども
月待つ人は世にあらず

月さへ山をはなれなば
背戸の柳にかげさすを
幾たび見てもろの影の
見ねぬ柳をうちみけん

今かくとつきかげを
のぼるを待ちし心根は
汝もわれもかはらねど
かくかはりしは何故ぞ
月ののぼるや後れけむ

妻やわの世に急ぎけむ
前にゆく身も後るゝも
いづれ落ちゆく西の空

傾むく影は惜まねど
せめてはつまの一言を
臨終にきかぬ本意なさの
うらみは月に残るなり

浦なれ衣

蜑のすむてふ須磨の浦
影うちかはす松が枝の
むら立つ磯の淋しきに
うらなれ衣ぬきすてゝ
木のまに掛し主やたれ

静かにかよふうら風に
長きくろ髪なびかせて
白きはだへに物かけず
身をもたせたる舷の
浅瀬に立つはろの主か
塵の浮世をはなれても
流石は月にはぢらひて
背きがちにそわけ來る
葦の若葉のうちろよぎ
わや繊る涙も静かなり
磯にのぼりて蜑の子の
玉の藻屑をうちはらひ

亂れし髪をしばりつゝ
小櫛を口にふりかへる
清きおもわに月さして

はれ渡る都の富士のよき朝に
玉なす和子をあげたまふらむ

柿は取りぬ茨苺は枯れぬ水ばやせぬ
銀杏は散りぬ秋はをはりぬ

残る心

今日もまた
知らぬ野山を踏越にて
涙はそでにかゝられど
はらひもあへぬ道芝の
露にぬれたる旅ごろも
あせゆく色をいかにせむ

袖は ふ
艶のいへにやすらへば

賤の少女のたちいでゝ
もてなしぶりの優しさに
年はいくつと打とへば
袖もて顔をかくしつゝ

はぢらひて
立てる姿はふるさとに
似きてわがこし吾妹の
わすられがたき面影に
親しくむかふ心地して
世にはわりけり似し人も

おもひ出の
たれとならんも心うく
情をこめてにおやかに
とむる袂をふりはらひ
ふりかへりつゝ越來れば
さても山路の險しさよ

野分して草はしどろになりにけり
糸秋の花さふらんの花

罪の終

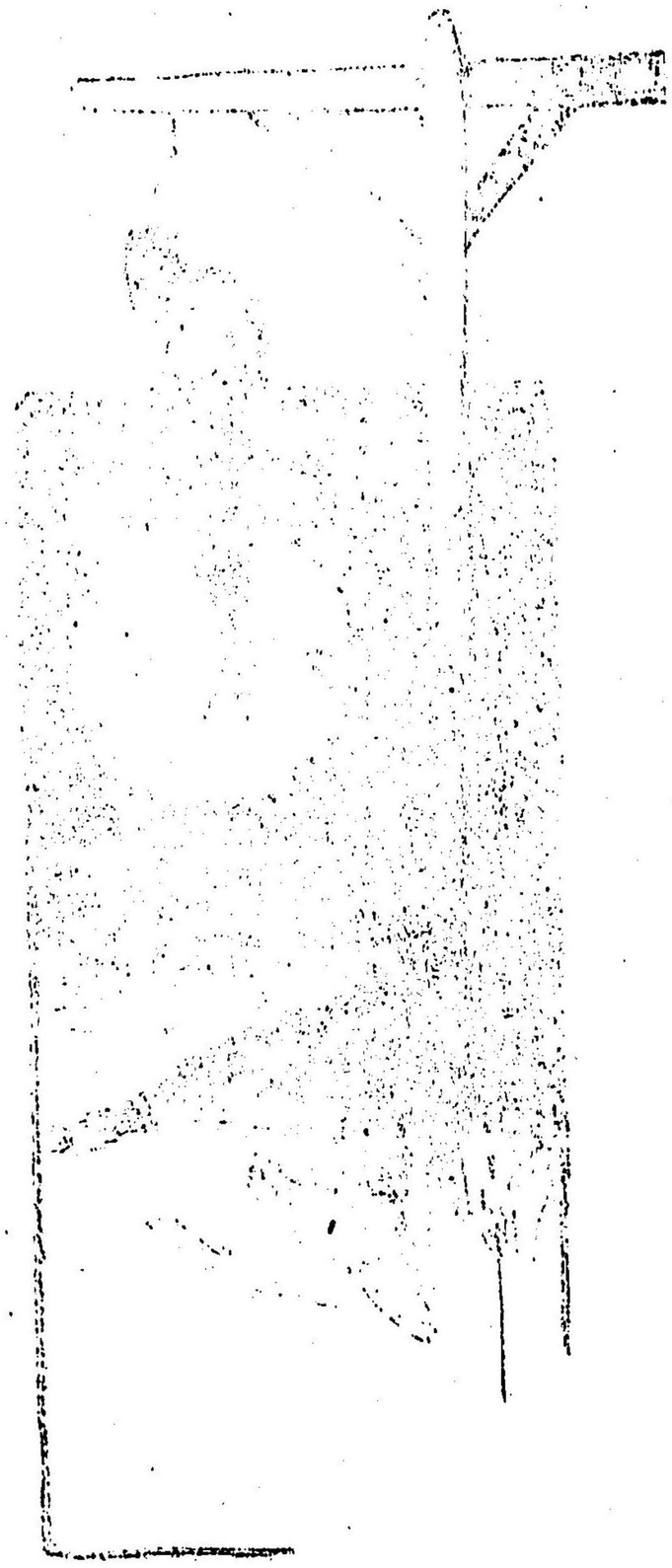
光かくれしうみの上を
新たにすべく汐に乘りて
わが世の岸に月は寄せぬ

人を罪より死にみちびく
たかき柱はいそに立てり
贖の多きをかたるごとく
いかに墓場の美くしきよ

苦痛を拭ふつきのひかり
いたゞく空は神つくれり

罪と謂ひまた善と謂ふも
彼のちからに任せたれば
人の子なにを諫め得んや

王者の權を陸に張れど
海は居るにひとをとはず
涙能くいくさの船を覆す



弱きは邪にまけたるなり
愛を説かんは智慧に遠し
闇にうちふる剣うばへ

征矢獵矢

春　月

遠き神代にはしきやし
清き少女のありけるが
冴えし光におもはゆく
我背の許をとひかねて
懇の恨みにはてしより
末の世までも亦の夜の
つきは恥となりにけり

山

山の名に負ふ妹と背の
なかをへだつる吉野河
散りくる花を浮べては
いづくの里に流れゆく

水と花とのしたしみは
春くる毎にまされども
思ひわりげにいつ迄も
わかれて立てり妹背山

女

少女の前に頬を染めし
君はあまりに若かりき

戀

みやこの塵を吹く風も
なびけぬものか振の袖

妹背の中のかたらひは
隔てぬうちに隔てあり

人目を忍ぶこひ路には
隔つるうちに隔てなし
いつれか戀のまことなる

其姉ぱ

月に向ひてつぶやきし
吾聲をしもきゝにけん
五つになれる弟の
物問ひたげに近よりぬ
訝かる様もことわりよ

なれがまだみぬ姉様の
呼べば答ふるわの空の
月のみ國におはすなり
歌ゆるまゝに姉さまと
二聲三こゑ呼ばゝれは
小笹の風におともなく
葉末の月のこぼれけり

磯づたひ

月明く

松風くらきいそつたひ
面わ背げて行くはたろ

戀ならば
母や待つらんとく歸れ
近くは家もみえざるに

世をすねて
月を追ひゆく途ならば
暗れやきかん君がうへ

戀とみて
咎めん人のありもせば
をかしからずや手弱女よ

露と薔薇

花は散れよとすゝむれど
露はちらじとすがりつゝ
うれはしげなる花薔薇
かざしにせんと妹の
仇のすさみに手折りけり

露の宿りはかはらねど
花はうらみに萎れつゝ

夢の別路

うつゝに見にぬ面影を
かへす衣にうらみつゝ
片しく小夜の袖まくら
夢見るうちは夢ならで
現とこそはむつみしが
覺めて跡なき別れ路の
はてを雲井に求むれば
落ちゆく星のかげ淡し

山の宿

都になれしあてびとよ
一夜は來ませわが宿に
ましらの聲を友として
榾火の傍によもすがら
語り明してかへるさは
庭のさゝ栗乞だなら
都の土産にまるらせん

寺

幾帝陵ををろがみて
あきかぜ近し二子やま
河州の露にそぼぬれし
袖のひまより打みれば
亂松一路藤非寺

袖しぐれ

時雨ばらつく日の暮に
わたる土橋の柿すゝき
なさけを包むその袖の
花が濡れよに友禪の
帶や著物はろろへるに
何が捌はて今日までも
さめてまろ寐の能しさに
夜半のかがみや淵化粧
開かぬふりすりや尙高く
盤をそろへてひな歌の

離れがいとしや廿五や六で
紅い八つ口ひら〳〵と

京

春さめしめる絃の音に
うつやつゝみの白柏子
ろでにたゝよふ水色の
淺きはあひか加茂河の

瀬々の流れに幾千々の
か弱き身をゆ任せてし

さとるゝさとらぬ幾春の
花はうつろふひがし山

春

霞となびき水と行く
春のあゝろは深けれど
八重に一重に亂れても
にほひを知らぬ椿あり

さくらと香り梅と咲く
春のこゝろは廣けれど

若菜摘みゆく野の末に
つぼみを持たぬ小草あり

海酸漿

戀に燃ゆらむ少女子の
その唇にふくまれて
優しき音をぞ山すなる
うみ酸漿よわだつうみ
光といかぬみなろこの
汐のうちに居りなれて
涙のまに〳〵ゆきし時

世に出でよとは汝が爲に
いかなる神のさゝやきし

紅き薔薇白き薔薇

あしたの露を清してふ
紅き薔薇を持てる子よ
ゆふべの露を清してふ
白き薔薇を持てる子よ

あかき薔薇のひらく時
朝のつゆにひかりあり

しろき薔薇の蕾むとき
夕のつゆにうれひあり

一人は爲れよ笑の子に
一人はつねに涙われ
笑となみたを與ふなる
神はいつれも清ければ

無弦弓 終

明治三十四年十月廿日印刷
明治三十四年一月十三日發行

定價金參拾錢

發行者 山縣操
東京市神田區南甲賀町八番地

著作者 河井幸三郎
東京市本郷區根津須賀町廿七番地

印刷者 大野喜六
同市麹町區飯田町四丁目卅一番地

印刷所 成功堂
同市麹町區飯田町四丁目卅一番地

發行所 東京市神田區南甲賀町八番地
内外出版協會

不許複製

河井醉茗編纂

詩美幽韻

（定價金貳拾五錢＊郵税二錢）

所謂少年國派の新體詩集なり掲載する所十五篇、婉麗なるあり嶄新なるあり高崇なるあり雄偉なるあり方今新詩壇上稀に見る所の作物すゝしろのやの「巖間の白百合」を最とし夜雨の「いてふ集」露子の「晋蟬布里」秋曉の「春宵臺獨賦」其他和郷白浪紫紅醉茗等の作何れも誦すべく謠ふべし（家族）

本書は文庫派詩壇の驍將河井醉茗氏が同派青年詩人の新體詩中金玉の作數十篇を精選して編纂したるものなり いづれを夫れと花あやめ引きぞわづらふ秀逸のみなれども取分けてすゝしろのや、夜雨、露子、秋曉、歌二編者醉茗のなどは、手馴れたるものと思はれたり批評子は之を新體詩好個の教科書として世の少年諸君にすゝむるに躊躇せず（學園）

瀧澤秋曉著

有明月

（定價金廿五錢＊郵税四錢）

衆星絢爛たる今の文壇に立ちて一異彩を放ち、江湖の環視を惹けるを瀧澤秋曉君となす。君今會心の諸作を輯めて「有明月」を編せらる 曉君は晴空の氷輪の如く、淡宕なるは白露の江に横はる爽明なるは收むる所、美文あり、韻文あり小説あり、が如く、字々絶にて尖巧細賦の態を存せず 全篇皆是れ著者獨得の心情詩、展べ來りて興の酣と潤氣の流露と、他に索めれたる紛々たる群書中、熱血あり、風骨あり、情の清醇なる獲べからざるの妙あり。想ふに浮艶鄙俚の文字を以て充たさ眼の窠臼なる、構想の豪宕にして雄大なる、本著の如きは、敢て之を好文の士に推薦して、永く座右の友となすも猶ほざるを信ずるなり。

目次

驟雨　寫生山水
立待月　匹夫の悔
妙義の秋　即興
涙　新情人
あらぬ浮名　廣寒殿の秋
菩薩面　常陸へのかへし
垣間見　秋思客
流水無情　とこよの關
花一枝　我がイ、ゼル
銀の淨玻璃
貧書生　鑛脈
ぬかり道　山百合
雲がくれ　元旦の田舍
ぬくたれ髪

文庫記者編纂

水あふひ

（定價金貳拾錢＊郵稅貳錢）

水の上に浮ぶはかなき草にも花は咲きて、雨に久しくふる水あふひの名も涼しげなり、こゝに水莖のあと輕く、折にふれてのすさびにも、新らしき情はゝもらんと、一卷に蒐めたるを『水あふひ』と題せり、紫うすき花の一よの、願ふはやさしき人の胸に凋まむ。

目次

故人……秋曉
桑摘……初夏……甲山
病情……歸……枯村
床……月……光陽
夕……雨……夢涯
葬……五……雲
記……隅……日
杜……浮……記
國……僕……庭
の……宮……吟
化學者……田……風
鉛……御……さくら
筆……所……
畫……
飛泉郎……
現……
紅……
曾山中の虹……烏……
水……
みどり子……醉……
若……
はかな草……江東
郷……
村……
陽……
涯……
夢……
風……
わくら葉……鳳晶子

文學士久保天隨著

七寸鞋

（定價金參拾五錢＊郵稅四錢）

近時紀行文を以て一家を成すもの麗水遲塚氏あり、花袋田山氏ありと雖も、麗水の叙景は常に千篇一律の弊に陷り、花袋の筆致才あり、天隨久保氏に至ては之に劣れり。其文字を用ふること縱横自在に、賭る所聞く所思ふ所を述べ盡して更に筆端の窘束を見ず。七寸鞋は氏が紀行文を蒐めたるものにして、正に氏が紀行文に堪能なるを證して餘あり。

山水の間に放浪せんとするもの、廬に蟄して想を白沙青松の間に騁せんとするもの、讀んで津々の妙味を覺ゆるべし（帝國文學）

少年園叢書

少年文學

（定價金參拾錢＊郵稅四錢）

本書收むる所 美少年幸田露伴鐵之鍛幸田露伴 少年の才智雛庭篁村永代橋宮崎三昧磯邊の浮世村上浪六 愛國五傑小傳坪內逍遙文恭將軍依田學海 寒江江見水蔭 御名代西村天囚渡邊華山商橋大華新世界の浦島森鷗外セイラ、クルーの話若松賤子等の數篇なり。這般の作品が、好奇心に富める少年の念頭に迎へらるゝの度は、博文館物の御機嫌取專一なるものに對して、歩を讓らざるを得ざる一面の損益以外に、崇高なる態度を以て少年に對するものあるは、眞面目なる少年文學の鼓吹に於て、本書を多とせざるを得ざるなり。（國學院雜誌）

高濱虛子著

俳句入門

（定價金貳拾錢＊郵稅金貳錢）

八篇に分つ。總論に俳句の性質、詩としての位置等を細說し、次に俳句を解すること、俳句作法（寫生、題咏、進歩）季、切字、動不動、緩急及び俳句雜話、順次に說述して、小冊二百三十頁俳句入門の實を有す。新思想もて俳句を運用せんとするの士には必須の書なりとすべし。（國民新聞）

此書、從來の俳論に比べて、遙に美學的、はるかに系統的、入門者によろしく、而して上堂者にも興あり。文章また雅馴。（早稻田文學）

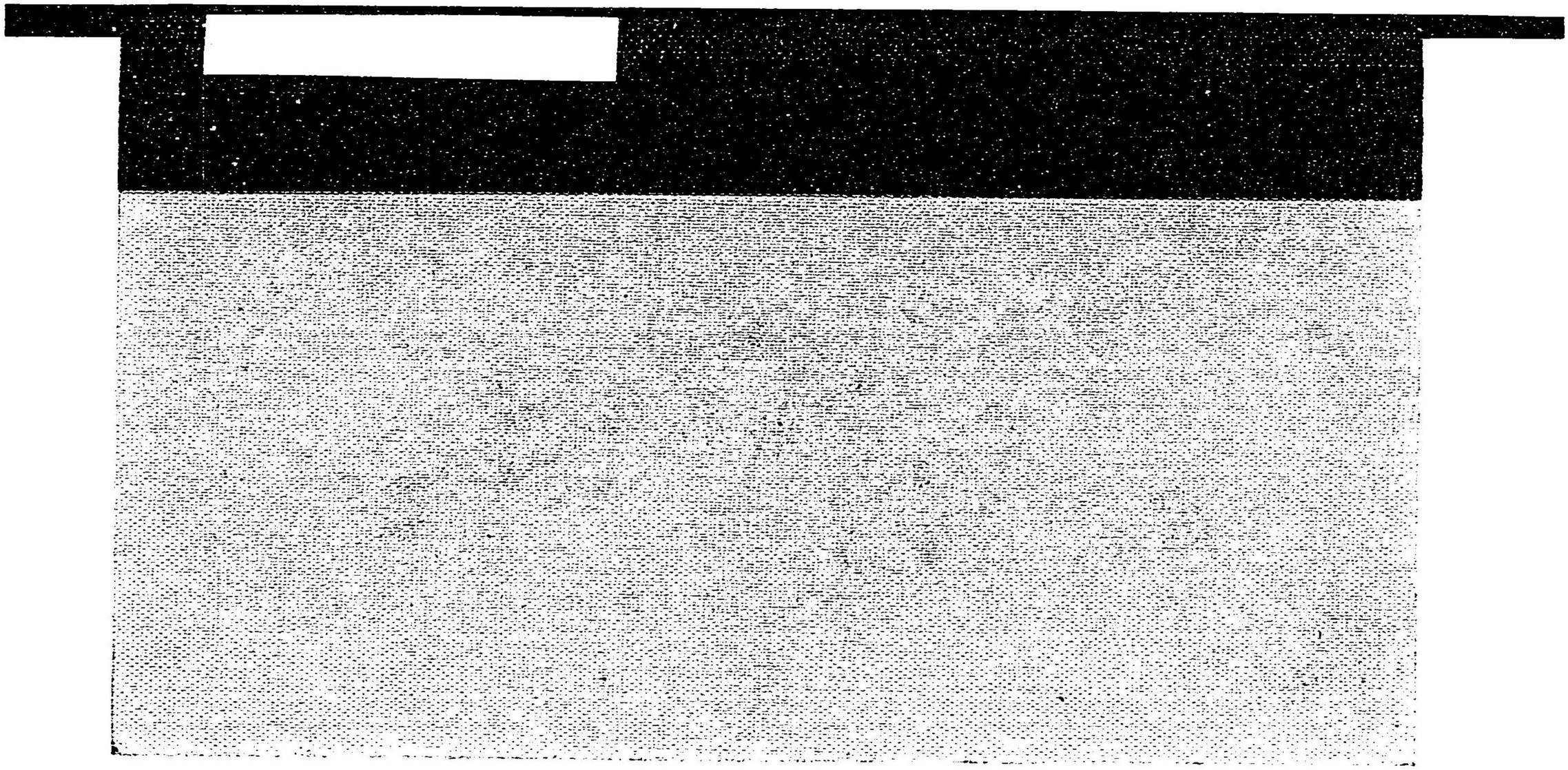
俗宗匠輩が、或は獨案內と名け、或は手引草と號して印行せるものに比すれば、固より日を同じくして論ずべきにあらず。我は初めて俳諧の道に入らんとする者に、此書を紹介するに躊躇せざる者なり。（帝國文學）

文庫

文章は明治廿二年の創刊にして隆替常なき文學雜誌中最古く最堅固に發行部數最多く讀書社會に最勢力を有す近來本誌の雄風を羨みて擬する者相踵ぐを以て祝るに足らん本誌の擴大するを知るに足らん特色は虛名なくて實力ある天下の俊才を一堂に招き集むるに在り凡そ新文士を待つあと最自由に最公平なるは本誌に若くはなく趣味の清新材料の豐富亦吾に自ら許す所偏狹なる中央文壇に對峙して蔚然一敵國なす今や第拾六卷第四號面目を刷新して出づ徹頭徹尾青年作家の奇稿を以て充たされ霸氣汪洋熱火四迸實に當るへからざるの觀あり天下の俊髦冀くは競うて趨り來れ

毎月一回十五日發行○定價金拾貳錢○六冊前金六拾六錢○拾貳冊前金壹圓貳拾錢○一ヶ年(臨時增刊四冊共)前金壹圓六拾錢(郵稅壹錢宛)

見本に限り郵券代用六錢 但注文者より何號と指定せらるゝ場合には拾參錢を要す



特22
78

無弦弓

国立国会図書館

088114-000-8

特22-78

無弦弓

河井 酔茗／著

M34

DBG-0211